

「フィリピン派遣参加報告書」

京都大学大学院文学研究科 修士1年
中原 慧

フィリピンへの渡航前には結婚移民として日本に渡ってくる人に関する印象を具体的に持つことは出来ていなかった。情報として困難を抱えているということは理解しており、言語面での困難が大きいということも知っていた。実際に、CFO (Commission of Filipino Overseas) において、結婚移民として日本に渡航予定の女性と話す中で、どの程度の言語能力で、またどのように日本人男性と関係性を構築しているのか、ということを実際に話として、私の感覚として知ることができた。

言語面では、日本にあと少しで渡航するとは思えないほど日本語の運用能力は低かった。代替的なものとして、英語でのコミュニケーションを試みたが、日本語と同様に円滑なコミュニケーションを行える程度の能力はなかった。確かに、このような言語的な能力の状況で日本に渡航すれば、様々な困難が生じることは想像に難くない。日常生活はもとより、仮に就労を希望する場合にも日本語の能力不足により断られることも往々にしてであると推測される。

また、日本人男性とのコミュニケーションや関係性の構築についても想像とは異なる状況であった。CFO 職員からのセミナーでもあった、SNS やインターネットを介した出会いというもの一般化していた。日本では、職場や学校など、対面での出会いからの婚姻が多いが、国際結婚においては、日本人が関係する場合でも、大きく異なる状況が存在することを痛感した。加えて、日本語や英語も覚束ないフィリピン人女性とタガログ語も話せない日本人男性がどのようにコミュニケーションをとるのかという点は、私にとって大きな疑問であった。一人の事例では、Google の翻訳機能を使用していた。近代的な方法と言えば聞こえはいいが、現実的には家庭での生活を営む上では問題もある方法であろう。

以上のように、実際に結婚移民の女性と話をすることで、なぜ日本に来ることが困難を伴うものであるか、ということの一端を知ることができた。また、CFO 職員によるセミナーでは、国際結婚が一種の人身売買となっており、それには SNS を含むインターネットの存在があるとのことであった。一方で、家族や親せきを通じた事例も多く報告されており、現実的には家計を助けるために自己犠牲を行う女性という側面もあると知った。国際結婚を考える際には、日本における困難はもちろん、なぜ日本に来たのか、どのように来たのかということも重要な領域であると感じた。

国際結婚以外では、DAWN や BATIS といった NPO への訪問では、かつて日本で働いていたフィリピン人女性や日本人とフィリピン人女性との間に生まれた子供たちと話すことができた。まず、かつて日本で働いていた女性たちに関しては、明るい印象を与える人が多かった。また、日本での出来事や体験をざっくばらんに話してくれることも印象的であった。私の想像では、日本での経験は思い出したくないような部類のものと思っていた。しかし、彼女たちは、「あなたと同じ苗字の客がいたよ」やその客との間での出来事を教えてもらった。どのように彼女たちが日本での出来事を捉えているのかという点がより気になった。

JFC (Japanese-Filipino-Children) と呼ばれる、現地では「ジャピーノ」と呼ばれる、子どもたちとの交流では、NHK で取材されていた子どもにも会うことができた。番組内では、再度の日本への渡航についての希望を明確には示していなかったが、彼自身は再度渡日し、父親との面会を希望している。また、彼の母親とも話すことができ、彼女も父親が彼への愛情を持っているはずと述べていた。アイデンティティを確立する必要がある JFC にとって、父親の存在は、「普通」の子どもとは異なるものであることが分かった。また、彼らの多くが、父親からの愛情を期待していることも大きな関心を寄せるものである。

以上のような経験から、今後国内外問わずフィールドワークをする際には、表面的な現象のみならず、当事者がその場に至るまでの経緯や背景を丹念に聞き取りを行えるよう努力していきたい。